スポーツ文化の風を発信する

NITTAIDAI 03

ニッタイダイ　2001年　秋

CONTENTS

SPECIAL
特集■NITTAIDAIの明日を語る
学長／大学院研究科長／体育学部長／体育専攻科長／
学部各学科長／教養科長／短大部長／短大各科長／
教務・学生・就職の各部長／健志台教学局長
INTERVIEW●アスリートたち――9
水泳部男子・北島康介／水泳部女子・藤丸真世
Active People●OB・OG紹介――11
News Eye●地域とともに生きる大学づくり――13
NEWS●上半期ニュース――15
クラブ情報●上半期クラブの主な大会成績――17
MY VOICE●みんなの広場――18
INFORMATION●dot. NITTAI――19

interview

特集

NITTAIDAIの明日を語る

時代はめまぐるしく変容し、大学は今、変革期の只中にある。競争的環境が政策として打ち出されたなかで、多くの大学が社会の要請に応えるべく大学改革を押し進めている。

そして、少子高齢化の中で、本学が果たさなければならない役割に対する社会の要請も、日増しに増大している。まさに「21世紀の日体大が・・・貢献し得る場は果てしなく広がっているのである」(学長インタビューより)。

4月に就任した長谷川学長のもと、大学、短大の新執行部がこの7月にスタートした。今回の特集では、学長、大学院研究科長、体育学部長、体育専攻科長、学部各学科長、教養科長、短大部長、短大各科長、教務・学生・就職の各部長及び健志台教学局長に対し直接インタビューを試み、それぞれが役割と責任を担っている領域で抱えている課題や今後の方針、そして改革にかける"熱い想い"を語っていただいた。

"21世紀創造型大学"。"改革"なきところに"創造"はあり得ない。

オールNITTAIDAIのエネルギーを結集し、21世紀に果たすべき本学の役割を実現したい。

学長
長谷川正明

我が国の高等教育は現在、戦後の新制大学発足期以来の大きな変革期にあります。大学のあり方を厳しく規制してきた大学設置基準が大幅に緩和・自由化され、教育課程や学部教育の編成が各大学の自由に委ねられるようになりました。また、国立大学の独立行政法人化や大学の「評価を重視した政策展開」の動きに見られるように、国公私立含めて名実ともに競争の時代に入りました。競争的環境の中で自由度が増すとともに、自己責任も要求される時代になったのです。

本学もそうした変革の時代の潮流から例外ではあり得ません。日体大は、体育・スポーツの専門教育機関として、また体育教員の養成大学として、110年に及ぶ長い歴史の中で社会的信頼を育んできました。しかし、少子化の進行の中で教員への道が狭まり、年々、学生の体育教員なる夢が難しくなってきています。最早、これまでの実績だけでは通用しない、厳しい環境に置かれていることを厳しく認識しなければなりません。

しかし一方、スポーツや体育に対する社会のニーズは益々大きくなってきていることも事実です。高齢化社会を迎え、健康を維持増進するためにアドバイス・指導ができる専門家が求められています。また、昨年、国が策定した『スポーツ振興基本計画』では、老若男女が生涯を通じてスポーツに親しみ、楽しむ、生涯スポーツ社会の実現に向けて、全国各市町村に「総合型地域スポーツクラブ」を少なくとも一つつくることが盛り込まれ、そこでのスポーツ指導者が要望されています。従って、21世紀の日体大が果たさなければならない役割と貢献し得る場は果てしなく広がっている、といえます。

しかし、学生諸君が本学において専門家として4年間スポーツの道を追求し、スポーツや健康を勉強していけば、それを活かした仕事に就ける、という就職環境に現在なっているわけではありません。それが本学が今直面している最大の課題です。大学での部活や勉強で得たものがストレートに活かせるよう、その場所の確保や社会的環境作りの実現に向けて今後、大学として努力していきたい、と思っています。

そうした厳しい状況下でも、学生諸君にお願いしたいのは、社会に出たとき、“スポーツの分野では負けないぞ”という自信とプライドをもってもらいたいということです。もちろんそのためには、努力の裏付けがなければならないのは当然です。日体大に入学したことの意味を考え、体育・スポーツの専門的な知識を勉強し、技術的にも実践的にも他の人とは違うぞというものを身につけるよう、充実した大学生活を送って欲しいと思います。本学は、そうした学生の努力と期待に応えてあげられる教育を提供するとともに、教える側の先生自身も常に厳しく自己点検してほしいと考えています。

“21世紀創造型大学”への課題は山積みしていますが、7月に発足した新執行部の方々とともに、教職員・学生・同窓会のオール日体大のエネルギーを結集し、21世紀に果たすべき本学の役割を十分果たし得る日体大の実現に向けて改革を図っていく覚悟です。

体育学科の特性とコースの充実を図りたい。

体育学科長
大内哲彦

体育学科は4学科の中で最も学生数の多い学科であり古い歴史ある学科です。現在のカリキュラムは、改組転換を目途に検討している段階で、2000カリキュラムとしてスタートしました。

2000カリキュラムは今年で2年目に入ってます。この完成年度までに、より時代のニーズに合った学科の特性を打ち出す必要性を感じています。

体育学科には学校体育コース、スポーツ科学コース、スポーツマネジメントコースの3つがあります。それぞれが特性のある教科目で構成されていますが、更に各コースの特徴を打ち出す必要は十分にあると意識しています。具体的な計画はまだ白紙に近い状態ですが、各コースの教員の個性による学生指導は急務とも言えましょう。そのためには教員のコース組織の編成を試みて、学生指導に当たることが必要と思われます。

学生諸君には授業にもクラブ活動にも全力で挑戦することを切望します。体育学科では中学校・高等学校保健体育教員の免許状を取得することができます。大学は卒業したが何の資格も持っていない、ということは寂しいことです。全ての教科を確実に学修して、是非教職の資格を持ち「日体大卒業」を誇りにして下さい。教職に就くことが厳しい時代です。例え教職に就かなくても、あらゆる面で教職課程で取得した全てが、将来役立つものと確信します。

大学の特性上、卒業すると「部活は何をしてきたか」を問われることは必至です。その答えが「クラブ活動はしていませんでした、教職の資格はありません」では情けないことです。どうか四年間、クラブ活動を全うし、「体育学とは何か」の全てを修得して社会で活躍することを要望します。

専任の教員を補充し、現場実習の充実を図りたい。

健康学科長
上野純子

健康学科は、時代の要請に応えるべくその使命を大きく変えつつあります。それは、今までの使命が、体育科学との連鎖の中で、どちらかというと健常者の健康問題を中心に教育の体系をつくってきたのに加えて、昨今の高齢化や少子化社会での健康問題に、どう対処していくのかが社会の要請になってきたことを受けて、本学が積極的にその要請に応えられる人材を育成することを明確に打ち出したからです。

その具体化として、2000カリキュラムにおいて、養護コースと社会福祉コースを設けましたが、それぞれいくつかの課題を抱えていることも事実です。養護コースの場合、例えば“看護学”や“学校保健概論”などの教科目に演習をセットにすることなどで、もう少し厚みのある教育をする必要があると感じていますし、子どものこころと体の健康問題を集中して教育する内容が不足している点などは、今後の検討課題だと考えています。社会福祉コースでは、来年度からの現場実習を受けて、巡回指導の教員が社会福祉士の資格を有することが実習現場から要請されていることにより、対応する教員の採用が必須です。また、学生にとっては、3年次で社会福祉士の免許を取得するための現場実習、4年次では教員免許を取得するための教育実習があることから、そちらも中途半端になることが予想されます。したがって、今後はいずれかの資格を選択し社会に適用する実力のある指導者養成を行うことが必要と考えます。

いずれにしても、スポーツで培った体力や、一般の大学ではない体育・スポーツの総合大学で学んだ知識や技術をベースとしながら、私たち教員、そして大学が、養護や社会福祉の専門的な知識と社会的に要請されている教養を、いかに学生に教育して社会に送り出してあげられるかが重要であり、健康学科の大きな課題でもあると考えています。

特集

NITTAIDAIの明日を語る

日本文化に理解がある体育人・指導者を養成したい。

武道学科長
三宅　香

武道学科では、武道の国際化の趨勢に対応しながら、日本の伝統文化という視野にたって、武道教育コースと伝統芸能コースに分けて教育し、武道の国際的な指導者を養成することを目的としています。また、それぞれのコースが、武道教育の場合は「柔道」「剣道」「相撲」など8つの専攻に分かれ、伝統芸能は「伝統芸能」(日本舞踊、民俗舞踊、能など)の1専攻で学ぶという特色を持っています。昨年度から開設した伝統芸能コースは、現在13名の1年生と、14名の2年生がコース選択をし、それぞれが志をもって学んでいます。開設して1年半が経過した今の時点で、改めて点検・評価を加え、課題を明確にしながら、更に充実した教育ができるように改善していきたいと考えています。

私自身、ドイツに留学していたときに、自らが育った日本の固有の文化について、いかに知識や体験がないかということを痛感させられた経験があります。日本の伝統芸能、日本の地域に根ざした伝統芸能であればあるほど、逆にそれ自体グローバルな広がりを持っているのだと思います。このように、他大学にはない、ユニークな視点でコースを開設するにあったっては多少の不安もありましたが、学外の関係者からも概ね良い評価を頂き、大学の垣根を越えて、伝統芸能の継承や指導者の育成に対し、熱い注目の的となっていることを痛感しています。

それだけに、日本の文化に精通し、日本人の身体の特性を理解した体育人を一人でも多く育て、社会に送り出すことが私たちの責任であり、巣立っていった学生が社会教育の分野や学校教育の授業、クラブ活動、体育祭などの、日本の多彩な教育の現場で必ずや活躍することを確信しています。

生涯スポーツ時代にふさわしい、指導者を養成したい。

社会体育学科長
森川貞夫

日本のスポーツが、学校体育から戦後、企業の運動部や「社会体育」という言葉で表現される地域スポーツに移行してきた訳ですが、来年度から実施される学校週五日制や企業運動部の衰退、あるいは学校完全五日制にともなう中学校、高等学校の運動部活動の「地域への移行」問題など、今まで以上にスポーツの受け皿として地域がクローズアップされてきています。

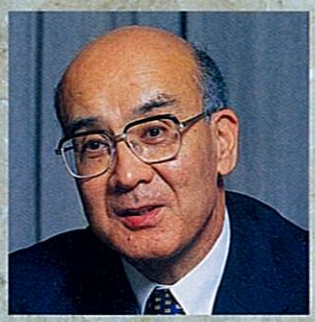
「スポーツ振興基本計画」は、その柱に"総合型地域スポーツクラブ"構想を打ち出し、地域におけるスポーツの受け皿としての役割を付与し、老若男女が総合的に複数の種目を、それぞれのレベルに合わせて、楽しく活動できるスポーツクラブ・ライフをビジョンとしているのです。

そうした時に、総合型地域スポーツクラブでのそれぞれの種目の指導者や、クラブのマネージャー、コーディネーターの養成はどうなっていくのか、という課題があります。現在の法体制の中では、その役割を担うのは社会教育主事ということになります。実は、全国の社会教育施設、公共施設、スポーツ行政等で活躍している社会教育主事に、本学社会体育学科の卒業生が大勢いることは以外に知られていません。社会教育主事(スポーツ担当)の育成は、私たちの使命として継続発展させていくことは当然です。

それに加えて、新たに、地域スポーツを中心とした専門職的指導者資格の創設、同時に総合型地域スポーツクラブのマネージャーや地域のステークホルダーを束ねていくコーディネーターなどの役割を担う総合的な地域スポーツの指導者の養成が急務であり、ここにも新たな資格制度をつくっていきたいと考えています。これが実現すれば、地域スポーツの振興はもとより、本学ばかりでなく体育系大学の就職市場が大きく広がっていくのです。

私たちには、生涯スポーツ時代に見合った学校体育を含めて、地域を中心とした新しい指導者養成のために、さらに教育内容を充実させていく課題と責任があると考えています。

幅広い視野に立って考えられる素養を身につけさせたい。



教養科長
緒方章宏

少子化の波の中でこれからの大学運営は大変厳しいものになるでしょう。その一方で社会の大学を見る目も増々厳しくなっています。こういう時代ですから大学は幅広い視野に立って、物を見たり考えたりできる、きちんとした教養を身につけた卒業生を社会に送り出すべきです。そういう意味で教養教育は、学生にとって必要不可欠です。特に本学の場合は教員志望の学生が多いわけですから、確かな知識や知恵と技術そして教養を身につけることが極めて重要です。人間は誰でも、いくつかの方向転換を余儀なくされます。本学の学生が一生スポーツのことだけを考え、やり続けるということは不可能でしょう。その方向転換のときに応用力が利くか利かないかは、その人の人生を大きく左右します。その応用力を支えるのが知識や教養です。

私は、本来の専門である憲法の他に4年生を対象にした「総合科目Ⅱ」を担当しています。その授業で、幼児虐待の問題、未成年犯罪の問題、そして臓器移植や環境ホルモンの問題などをテーマにしていますが、多くの学生が興味を持ち、さらに一歩進んだ学習のために研究室を訪ねてくる学生も少なくありません。

一般教養科目を担当する教員は、非常勤講師の先生方も含めて、いかにして学生たちの学習意欲を湧かせ、しっかりとした教育をするか、また時代の流れに応じてそれぞれの教科目の中味を充実させていくかを真剣に考えています。

体育・スポーツの大学で、確かな知識と技術と教養、そしてその応用力を学生たちに教育していくということは、大変な面もありますが、私たちが果たさなければならない役割と責任は重大です。

私自身は、教養科長として、教養科目に関わる先生方の"教養教育"にかける情熱や想いを束ねる、まとめ役としての役割を担っていきたいと考えています。

“骨を豊かに育てる”ためのカリキュラムを考えています。

短期大学部長
富岡元信

短大は現在、社会からの要請も踏まえ、体育科・保育科の両科において、2000カリキュラムを含む教育方針の抜本的な見直し作業を進めているところです。

日本体育大学の体の旧字は「體」と書き、“骨を豊かにする”意味です。それを育てるということが体育であり、骨を豊かに育てるためには、身体・筋肉を強くしなければならず、また精神面・心も強くしなければなりません。そうした意図から骨を豊かにするために、現在自由選択になっている実技を必須にするつもりです。そうすれば、中学の保健体育の免許状を取得できる体育大学系の短大に相応しくなってくるのではないか、と思っています。もちろん、苦しさが出てくるでしょう。しかし、今の楽しさよりも次の夢に向けて頑張れば、結果として「ああ良かった。私の子供も日体大に行かそう」と感じる卒業生を育てることができると思うのです。

具体的には、体育科は、村本体育科長を中心に“動ける中学校の免許保持者”を標語に、生涯スポーツを展開しているスポーツ産業に人材を提供していこうと思っています。

また、保育科では、就職市場が20才を望んでいることもあり、村上保育科長を中心にカリキュラムの見直しと同時に、「保育士」の平成15年開講で動いています。特色ある保育士を目指し、“泳げる保育士”を看板にしようと考えています。泳げるということは、歩くことも走ることもでき、幼児たちに身をもって身軽に動けるんだ、ということを体育大学だけに標榜しなければいけないと思います。

実技科目を選択から必修の方向で検討したい。

体育科長
村本和世

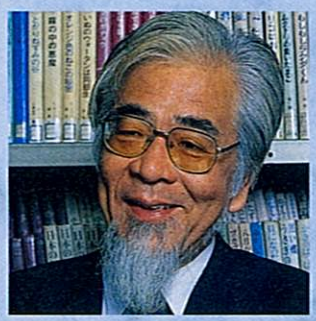
本学は、常に社会の要請に応えるべく、カリキュラムの改定と教育環境の整備に努めています。体育科には、生涯スポーツ、学校体育の2コースがありますが、生涯スポーツコースでは、昨年から国際交流の実習を始めました。アメリカでの10日間の実習で、トレーナーの資格取得制度を統括するNATA（National Athletic Trainer´s Association）の有資格者からレベルの高い米国のトレーナー事情を聞け、学生たちも国内では得られない知的刺激を受けたようです。

また、同じ生涯スポーツでは、国際交流実習（国外）と対応するようにスポーツ現場実習（国内）も実施しています。フィットネス産業やスポーツ系のサービス産業への2週間のインターンシップで、就職先として希望の多いスポーツ産業の実状や仕事の実際を体験してもらっています。

体育科の検討課題は、体育大学の短大でありながら最近の学生は実技に弱いことです。そのため、現在、2000カリキュラムの見直し作業を進めるところですが、選択になっている実技科目を教職免許（中学校保健体育）取得にふさわしい必修とする方向で考えています。その他検討課題はさまざまありますが、例年より委員会の会議数を増やし、各先生方との意見交換を踏まえて、少しづつ改良していきたいと思っています。

いずれにせよ、今後も短大としての活性化を図りながら、学生が卒業するさいに、「日体大に来て良かった」と、思ってもらえるような体育科にしていきたいと念じています。

保育士資格も取得できる体制を目指しています。



保育科長
村上春夫

本学保育科では、いまは幼稚園教諭の資格しか取得できませんが、平成15年からは保育士の資格も取得できる方向で、現在動いています。この2～3年、幼児を取り囲む環境が変わって、幼稚園でも「預かり保育」をやるようになり、幼稚園教諭と保育士の両方の資格が必要になってきたからです。

保育士開設の問題は今までもありましたが、日体大の健康教育に対する評価があって幼稚園教諭で充分就職できていました。実際、教諭希望者の90%が幼稚園に就職しています。就職先は、募集先へ就職するケースが多いですが、教育実習へ行って「あなたが欲しい」といわれ、そこに就職するケースも結構あります。教育実習先では、みんなよくやっており、好感を持たれています。

保育科では体育大学の伝統に学び、運動を通して培われた、健康的な明るさ・行動力・ねばり強さで取り組む実践力を身につけた教師の養成を目指しています。そのためカリキュラムも、身体運動とからめて実際に幼児の健康指導ができることを柱にしていますが、その上で子供を楽しく指導するという教科を今後、強化する方向でいます。例えば、ことばと身体活動の結びつきは重要ですが、子どもの関心を惹きつけることができるような「語り聞かせ」を体得するなどです。さらに、2002年からは、実際に体を通した実技の指導を強化していくために、健康だけでなく最低限、ピアノを弾けるよう、音楽・器楽の実技を増やしていきたいと考えています。

課題を整理し、次を迎える準備のための地固めをしたい。

教務部長
山田　保

2000カリキュラムは、健康学科の「社会福祉コース」や武道学科の「伝統芸能コース」の開設に見られるように、従来の日体大にはない新しいことを含んで作られたカリキュラムで、教務部としてはいかにこれを上手に軌道に乗せるかが課題です。しかし、スタートして2年目を迎え、この間の展開の中で問題があるのかどうか、現在、各学科ごとに問題点の洗い出しと見直しをお願いしているところです。

カリキュラムの構成は、体育の教員免許は勿論のこと、障害者スポーツ指導員、レクリエーションコーディネーター、司書教諭、健康運動実践指導者、競技力向上指導員(C・B級コーチ)、アスレティックトレーナーなど、取得資格の増大に見られるように、社会の要請に応える形で科目数が増え、複雑多岐にわたるようになってきています。そのため、さまざまな問題が出てきており、学生や先生方には、カリキュラムのシステムの全体像を分かり易く理解してもらえる作業が必要だと認識しています。また、トップアスリートの処遇・指導の問題、学年暦の問題などの検討課題もあります。教務部としては先ずは、こうした現実の問題を着実に処理しながら、当面の課題をきちんと整理し、次を迎える準備のための地固めをしていきたいと思っています。

“学生寄り”の学生部を目指していきたい。

学生部長
清水義明

学生部では、学生証・学割発行等の窓口業務、日本育英会奨学金や各種奨学金の手続き、学生相談、交換留学生、拾得物に関すること、下宿・アパート・アルバイト情報の提供など、学生の福利厚生に関する業務を行っています。

最近の学生は、挨拶・礼儀や人との協調性が欠け、気質が変わったといわれています。しかし、授業やクラブ活動を通じて学生を見ておりますと、きちんと接してあげれば、その根っこでは今も昔も学生の気質は変わっていないと思います。確かに子ども扱いも大人扱いもできない難しい年代ですが、個人として扱うことが大事だと思っています。

学生部は、他の部署と異なり、キャンパスライフを送る学生にとって最も身近な窓口であろうと思います。ひとりひとりの学生とのコミュニケーションを大切にし、より“学生寄り”の学生部でありたいと思っています。

今後も、スタッフをより補充していただき、福利厚生施設を充実させるなど、学生生活を全面的にバックアップしていきたいと思います。

さらにきめ細かい就職対策や広報を図っていきたい。

就職部長
井筒次郎

就職部では企業、教員、公務員を3本の柱に就職対策事業を行ってきましたが、ここ十数年、教員採用が厳しいと言うことで、中でも企業就職に重点を置いた講習会を数多く実施してきました。

最近、教員採用もようやく明るさを見せはじめ、昨年度から、本学の本来の使命である教員養成の為、研修会をさらに増し、充実していこうと言うことで、再度教員採用に向けた事業を展開し始めました。入学してくる学生のほとんどは教員志望で入ってきていますし、保護者も望んでいるからです。

具体的には、OBの校長による教職の心構え、採用試験についての講座の開設、同窓会が組織しての教員対策の講習会など、就職部と同窓会がタイアップしながら充実していければと思っています。これらの講座には在学生はもとより、卒業後、教職を目指している卒業生にも開放できるシステムも検討しています。

また、就職活動行事への学生の参加率が良くないので、学内掲示や学内放送など学生への広報活動にもっと力を入れるつもりです。本学就職部は伝統的にきめ細かい指導をしてきていますが、同窓会と保護者会と連繋して、さらにきめ細かい充実した就職対策をしていきたいと思っています。

教育環境の改善を図り、地域住民との交流を図りたい。

健志台教学局長
大坪敏郎

2000カリキュラムがスタートしてから1年生全員が健志台で学ぶようになり、今までの倍の2600人(学部の46%)が健志台で学んでいます。そのため、教室など施設不足の状態に陥っているのが現状の大きな課題です。それを含み、現在教学局には課題が3つあります。大学の将来構想計画がまだ明確に確立されてはいませんが、今後、以下の方向性でその解決を図っていければと思っています。

先ず一つは、緊急の課題でもある、学生がスポーツと勉学に励むことができる施設・設備などの教育環境の整備。二つ目は、各運動部の競技力をより強化するために、大学院や体育研究所の専門の先生にお願いして、栄養士・コンディショニングトレーナーやメンタルトレーナー等の専門家との協力によるチームづくりを図るバックアップ体制の構築。そして、三つ目は、地域住民との融合・交流です。現在、開かれた大学として公開講座が世田谷キャンパスで毎年行われていますが、健志台キャンパスの施設を利用して、子どもの初心者や主婦、高齢者を対象とした水泳、水中エアロビクス教室など、さまざまなスポーツ教室の展開が図れればと思っています。地域住民に好かれる、健志台キャンパスの形成がこれからは大事と思っています。

競泳

世界の頂点を狙う、日本水泳界の若きエース。

シドニー五輪の男子100m平泳ぎで、惜しくもメダルを逃したものの、高校生で世界の強豪に伍して4位入賞を果たした北島康介。それから1年、「世界水泳選手権で絶対メダルを取る」と公言した北島君は、福岡で見事、悲願の銅メダルを手にした。インカレでも活躍した北島君に、学生生活を含めいろいろ聞いた。

北島 康介

（体育学科1年・水泳部）

―水泳を始めた時期とオリンピックを意識し始めたのはいつ頃からですか？

北島●家から近い東京スイミングセンター（TSC）の初心者幼児クラスに入り、5歳から始めました。オリンピックを意識したのは9歳のとき、少し上の岩崎恭子さんが優勝したバルセロナ大会からです。特に、男子平泳ぎで4位に入賞した高校生の林亨さんに憧れ、目標にしてきました。

―日体大に進学した理由と、自分が日体大生であることを意識する時はどんな時か教えて下さい。

北島●目標を4年後のアテネ大会においていたので、五輪で頑張れるよう、大学のバックアップがあり、水泳に集中できる環境、ということから入学しました。

普段は、TSCの仲間との付き合いが多いんですが、インカレでは敵になります。インカレに大学名で出場し、水泳部の仲間と一緒に闘った時には、日体大生であることを強く感じました。

―世界水泳選手権を振り返っての感想と今後の課題を聞かせて下さい。

北島●今年はメダルを取ることを目標に頑張ってきたので、それが達成でき、とても自信になりました。しかし、200mでメダルが取れたのは100mが4位だったからで、僕にとっては、100mの4位の方が価値があると思っています。

課題は、体力面で外人選手に比べてまだ劣っているので強化を図ることと、技術的には完成に向かってますが、まだフォームに改良の余地があることです。記録を伸ばす上で必要なことは絶対妥協せずに追求していきたい、と思っています。

―大学の授業はどうですか？また、オフの時の気分転換はどうしてますか？

北島●講義はすごく自分のためになりますが、実技は余り好きではないですね。高校2年の冬に、友達と腕相撲をしていて肉離れ。そして五輪後の10月には、サッカーの授業中に右足首を骨折して練習ができなかったので、ケガが怖いんです。

オフは泳ぎを考えず、友達と遊んだり、買い物に行ったりして、気分転換を図ります。また、映画が好きなので、暇があれば映画館に行ってます。最近は、「AI」や「千と千尋の神隠し」など話題作を観ました。

―今後の目標なり夢を聞かせて下さい。

北島●来年開催される、パンパシフィックやアジア大会や世界短水路選手権で優勝を狙うことはもちろんですが、100mは1分を切ること、200mは世界記録を出すことを目標にしています。アテネまではまだ時間があるので、失敗を恐れず、さまざまな調整練習に意欲的にチャレンジしながら、世界の頂点を狙える地力をつけていきたいです。

（10月16日、東京・世田谷キャンパスにて）

PROFILE

きたじま・こうすけ●1982年東京生まれ。
私立本郷高校出身。
水泳部・東京SC所属。
10歳でジュニアオリンピック50m平泳ぎ優勝。中学3年の時、全国中学校選抜において100m・200m平泳ぎの2種目を制して頭角を現す。高校1年・2年の時、インターハイ連続優勝（100m）。高校3年の日本選手権では、100m平泳ぎで1分1秒41の日本新記録で優勝。シドニーオリンピックでは、100m平泳ぎで惜しくもメダルを逃したものの、男子競泳の日本選手では最高位の4位入賞を果たした。
今年、福岡で開催された世界水泳選手権の200m平泳ぎでは日本新で銅メダルを獲得。9月のインカレでは、100m・200m平泳ぎともに大会新で優勝。
現在、100m平泳ぎ（1分00秒61）と200m平泳ぎ（2分11秒21）の日本記録保持者。
身長176cm、体重68kg

シンクロナイズド・スイミング

アテネオリンピックを目指す、次代の華。

シドニー五輪で見事、銀メダルに輝いたシンクロ日本代表チームの金への挑戦は、飽くことがない。新チームを結成して臨んだ世界水泳選手権では、『侍』をテーマに銀メダルを手にし、着実にアテネに向けてその一歩を踏み出した。チームの一員として次代を期待されている藤丸さんに、シンクロの醍醐味などを聞いた。

藤丸 真世

（体育学科4年・水泳部）

—シンクロを始めたのはいつ頃からで、キッカケは何だったんですか？

藤丸●3歳の頃、家から近い「アクラブ調布」の水泳教室に入ったんですが、小学校2年で選手コースに入る際、競泳かシンクロのどちらかを選ばなければならないのです。私自身は競泳も自信があったのですが、"女の子があまり逞しくなっても"という母の勧めもあってシンクロをやるようになりました。でも、結果はそれほど違いがありませんでしたが…。

—日体大に入学した理由を聞かせて下さい。

藤丸●中学の体育の先生が日体大卒業生ということもあって、中学時代から日体大への進学を希望していたことと、母からも「日体大がいいんじゃない」と勧められたことからです。また、私自身シンクロをやっていく上で、体育・スポーツを勉強した方が自分に絶対プラスになると思ったからです。

—この4年間、日体大で何を学びましたか？

藤丸●シンクロは、身体の見た目が重視され、またオールマイティな運動能力が要求される競技です。私は筋肉が堅く、関節のつき方も悪いので、まず自分の体を知ることから始めました。で、授業以外にも意欲的に図書館で本を借り、少しづつ自分の体のことを知ることができた、と思っています。今では、意識的に食事にも気を付け、試合にはベスト体重にもっていけるようになりました。

—シンクロの醍醐味や面白さ、そしてナショナルチームAとBの違いについて教えて下さい。

藤丸●シンクロの採点基準は、美しさ・正確さ・創造性・難易度などですが、その演技内容は、パワフルでスピーディーだけでなく、バレエのような芸術性や豊かな表現力が求められます。ですから、5分間の演技時間で、リフトなどの大技を含め、8人が一体となってみんなのテーマを表現できた時の達成感は、何物にも替えがたいです。

ナショナルチームAは代表チームで、国内選考会の上位者10名までが入り、その下から20番以内の人がBになります。私は今年からAに入りましたが、やはりBとは緊張感が全然違います。また、ソロ、デュエットはジャパンでは上位者2名しかできず、私はそれを目指しています。

—今後の課題と、当面の目標なり夢を聞かせて下さい。

藤丸●課題は、もっときれいに見せるための技術を磨き、更に持久力をつけることです。今年のソロ・チャンピオンであるロシアのブロウスニキナ（22歳）を目標に、当面は一つでも上のランクを目指して挑戦していきたい。その努力の積み重ねの先に、アテネ五輪もデュエットの演技もあると思っています。

（10月16日、東京・世田谷キャンパスにて）

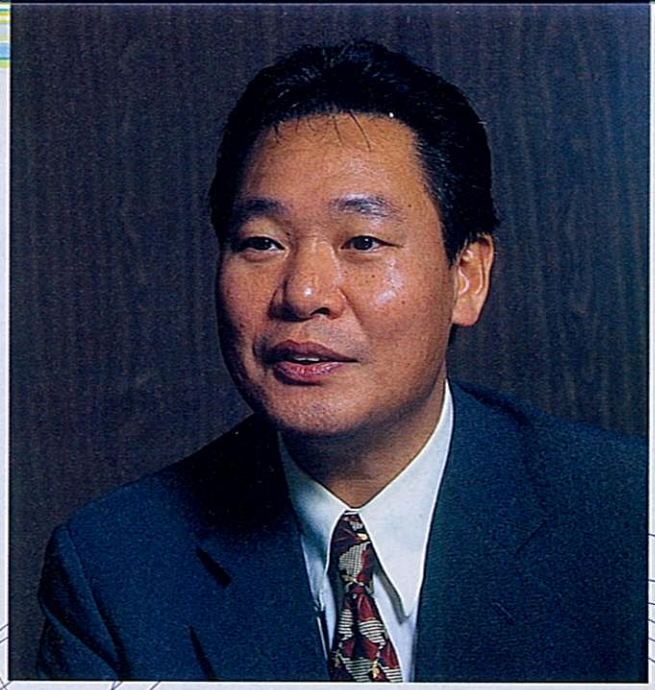
PROFILE

ふじまる・みちよ●1979年東京生まれ。
私立藤村女子高等学校出身。
水泳部・アクラブ調布所属。
小学校6年の時、ジュニアオリンピック出場、ソロ4位。中学1～3年、ソロ(S)・デュエット(D)の2種目で優勝。高校1年、ジュニアワールド（ドイツ開催）でチーム(T)2位。高校2年、ナショナルチームBに選出され、スイスオープンでT3位。大学入学後、98年・99年のスイスオープンでD・T2種目で優勝、00年ローマオープンでD2位・T2位、日本選手権でS2位、ナショナルチームAに昇級。
今年、福岡で開催された世界水泳選手権のシンクロTで『侍』を演じ、銀メダル（98.083点）を獲得。
気分転換は、友達に会ったり、GLAYを聴いたりする、ことだという。

関口 吉運さん

せきぐちよしのぶ

私立ライン幼稚園園長
（デュッセルドルフ市）
［1983年3月武道学科卒業］



海外から日本を見ると、いろいろ見えてくる。若いうちにもっと国際的な感覚を養ってください。

日本企業の海外支店などの駐在員が4万人を超える現在、ほとんどの駐在先に日本人学校がある。とはいえ、日体大卒業の人間が海外で幼稚園を経営している例は、まずない。その例外が関口さんである。

関口さんの経営する「ライン幼稚園」は、“小さなパリ”の異名を持つデュッセルドルフ市にある。デュッセルドルフは、多数の重工業企業が本社を置くドイツ商業の一大中心地である。また、日本航空をはじめ、銀行、メーカー、商社など、多数の日本企業の支店等があり、日本経済の欧州の中心地でもある。日本企業は350社ほどあるといわれ、60万都市の市民の100人に1人が日本人で、“日本人の街”と言われるほどである。

ライン幼稚園は、そうした日本企業の駐在家族の子どもたちを対象とした幼稚園で、97年に開園した。2歳児～5歳児までを対象に4クラスあり、現在、100～110名の子どもが在籍している。先生のほとんどが日本体育大学女子短期大学保育科卒業で、教育方針は、「駐在家族の98%は帰国するので、帰国した時に、子どもがすぐ日本の環境にとけ込めるようにする」とのこと。そのため、日本の習慣を忘れないよう、餅つき・豆まき・鯉のぼり・七夕などの行事を必ず取り入れているという。

ところで、関口さんは何故ドイツで幼稚園を始めたのだろう？実は、関口さんは、幼稚園を始める前に託児所を経営していた。「94年に、買い物や語学教室に通う日本人の主婦向けに、2～3歳児を預かる託児所を始めたんです」。しかし、バブル後、日本企業の駐在員が若年化し、幼稚園の需要が非常に増え、入れない子どもが出てきた。現地の幼稚園も足りず、ドイツ文部省の力で緊急に幼稚園を作ろうとしていた時期だったらしい。そこで、託児所から幼稚園にした訳であるが、「学生時代に3年間、幼稚園のアルバイトをしていた関係と、非常に子どもが好きだったこと」が動機だという。

関口さんがドイツに渡ったのは、その託児所開設より更に前になる。大学卒業の83年、決まっていた体育教師の就職先を断り、ドイツに来た。当初は、剣道を教える目的だった。「先生の要請を受け、2年間契約でドイツの剣道連盟に教えに行ったんです。ナショナルチームをはじめ、ドイツ全土で教えました」。

しかし、途中から会社を設立し、不動産業、貿易、その他の商売をやり始める。「2年間で何かを得たかったんですね」とその動機を語るが、渡航した直後は全く、話せなかったという語学力で、不安はなかったのだろうか？「正直、不安はありましたが、覚悟して行きましたし、若さとエネルギーだけで、怖い者知らずだったんでしょう」と苦笑しながら語ってくれた。

最後に、「私の頃は体育大独特の厳しい上下関係がありましたが、そうした経験は社会に出てから非常に役立ってます。辛いこと、理不尽なことは、社会に出ても同じです。また、海外に出て、外側から日本を見ると、いろいろなことが見えてきます。だから、若いうちにもっと国際的な感覚を養ってください。日体大生には、充分にそうしたチャンスはあります」と、学生への温かいメッセージをいただいた。

（10月14日、東京・世田谷キャンパスにて取材）

小林 峰子さん

こばやしみねこ

花柳徳次海舞踊教室主宰
武道学科伝統芸能コース非常勤講師
[1959年3月短大体育科卒業]

身につけた財産が一番です。学生時代は、何にでも積極的に挑戦し、身につけてほしい。

まだ馴染みのない人の方が多いが、実は小林さんは武道学科の先生で、昨年より開設された「伝統芸能コース」とダンス部で日本舞踊を教えておられる。本職は、日本舞踊の流派の一つである花柳流の名取で、花柳徳次海の名で舞踊教室を主宰され、40人を超える門弟の指導に当たられている。その先生が日体大で教えることになったのは、「学生が将来、教師となった際、生徒の指導や外国との交流などで伝統芸能が大いに役立つのではないか。また、日本舞踊の普及活動に頑張ってくれるのではないか」という思いからだという。

現在、先生は1・2年生を教えているが、「日舞は見慣れていないからか、割と新しがってくれ、出席率はとても良い」という。「興味を持ってもらうよう、分かり易く、楽しくをモットーに、扇子・手拭いの使い方、首の振り方、腰の入れ方などの基本動作を、知っている曲を通して教えている」。最初は、「左前に着たりと、着付けから始めなくてはならないので」大変だったらしいが、2年目になると、「着物を着ることにも慣れてきて、踊る楽しさも覚えてきた」という。そして、最近は、その成果をダンス部の学生と一緒に実演会で発表できるまでになった。

ところで、先生が秋田県から日体大に入学したのは、今から40年以上も前の昭和32年。短大が開設されて4年目、武道学科も東京タワーもなく、テレビもまだ普及していない時代である。それでも、復興から国民生活が急速に向上し、東京は人口851万人を超える世界一の都市として、若者の憧れの街として活気に溢れていた頃である。

そんな東京に先生も憧れていた。先生は3歳から花柳流を習い、叔父さんが芸能関係にいたこともあって、「芸能界や舞台に進みたかったから」と語る。しかし、「芸能界だけを見るのではなく、むしろいろいろ技術を身につけた方がよい」と叔父さんから諭され、「体を動かすのは好きだし、体操の先生は自由も多い。日体大に入れば、体操の先生も芸能関係の仕事も両方できるのでは」との思いから入学したという。

入学後の先生の学生生活はエネルギッシュで、向上心と夢に満ち溢れている。先ずは、当初、女子の入部を断っていた空手部に1ヶ月粘って認めさせ、日体大空手部の女子第一号になり、2年の時に初段さえ取る。更に、剣道部でなぎなた同好会を作ってキャプテンを務め、警察道場に護身術の指導にも行く、というすさまじさだ。また、花柳流の方も、1年生の時に名取を取り、2年生の時には近所の奥様方にアルバイトで教えていたという。「あの頃の日体大は割と自由で、授業後は何をしても構わなかったんですよ。だから欲張って、ダンス部、空手部、なぎなた、といろいろ挑戦しました。ハードでしたが、楽しくてしょうがなかったですね。わずか2年間の学生生活でしたが、正に“自分の青春そのもの”でした」。

そんな先生が最後に学生に贈ってくれた、「やりたいこと、覚えたいことは、学生時代の今だからこそ、欲を出して挑戦して欲しい。上手に大学を活用して、自分の身を肥やすこと。身につけたものだけは、絶対なくならない。身に付けた財産が一番です」というメッセージには、充実した学生生活を送られたからこその確信が込められていた。

(10月10日小林さんの御自宅にて取材)

今、輝いている

Active

地域とともに生きる大学づくり

大学・地域間連携の具体的な動き

「大学冬の時代」・・・・。その兆候が具体的に現れてきた。

『日本私立学校振興・共済事業団の調査によると、2000年度に入学者が定員に満たない大学は全体の28％に当たる133校で、前年度より44校増加。定員の50％を割った大学は同14校増加の17校になった。短大はさらに厳しく、58％余りが定員割れだった』（6月4日付：朝日新聞）。また、地域別の入学定員充足率（入学者／入学定員×100）を見ると、大学で100％に満たない（定員割れ）地域が北陸、中国・四国地域。短大に至っては、すべての地域が100％を満たしていない。まさに「冬の時代」の到来である。

こういった情勢の中で、大学と地域との連携のための具体的な動きが見え始めてきた。

《地域との連携。その4つの類型》

大学と地域の連携支援を事業展開の柱に据えて活動している”NPO法人コミュニティ・フォーラム（準備会）“は、7月に「地域コミュニティにおける大学の役割についてのアンケート」を全国の私立大学、短期大学部、私立短期大学、公立短期大学に対し実施、145通の回答が寄せられた。

同「アンケート報告書」（以下「報告書」）によると、回答を寄せた全ての大学・短大が、地域との連携を強化することの必要性と、大学・短大がその責任と役割を担っていることについて認識し、それぞれが具体的な取り組みを行っている。「報告書」は、地域との連携の実践例を”知的資源還元型“（公開講座の開催等）、”広報型“（オープン・カレッジの開催等）、”地域振興型“（大学間連携や産学官共同での地域振興事業等）、”大学改革型“（地域振興を目的としての制度・システムの改革等＝地域振興関連学部の設置等）の4類型に分類し分析を試みているが、特に”地域振興型“について、45大学・短大、20自治体が参加する”学術・文化・産業ネットワーク多摩（準備会）“などの活動を紹介しながら『・・・地域産業の復興や地域文化の向上、地域が抱えている諸問題解決のための政策提言など、積極的な役割を担っていることが窺える』としている。

また、大学の施策として、地域関連学部・学科を設置する動きも盛んである。具体的には、作新学院大学・地域発展学部、大阪経済大学・地域政策学科、金沢経済大学・地域経済システム研究科、明治大学・地域行政学科などがあげられる。「報告書」は最後に『・・・ここで重要なのは、私学を取り巻く厳しい情勢の中で、それぞれの大学が一歩踏み込んで地域との関係づくりを模索し、実践し始めているという事実であり、そこに”地域とともに生きる大学づくり“という大きな方向性を読み取ることができるのではないだろうか』と結んでいる。しかし、大学間の取り組みにはかなりの温度差があることも事実であり『・・・地域との関わりを模索しながらも・・・（大学の）地域政策として高め切れないでいる』現状も直視しなければならないであろう。

《大学が地域形成の核に》

”学術・文化・産業ネットワーク多摩（準備会）“で中心的な役割を担っている法政大学多摩地域社会研究センターの「第15回法政大学多摩シンポジウム報告書」は、地域における大学の役割について『今後における大学の存立基盤を確保するための方策の一つは、単なる地域貢献にとどまらず、大学が地域形成の核になることである。大学がそうした機能を果たすならば、当然他地域の人々の注目するところとなり、密接な関係が生じよう。さて、地域形成のあり方は、きわめて多様である。また、大学が地域形成に貢献するといっても、そのあり方も多様である。地域における人材形成、まちづくり計画への参加、新しい産業の創出、等々、大学のかかわり方は多様である』（清成忠男・法政大学総長）、『日本でも大学が今後地域で大きな役割を果たすことになるだろうが、現状では大学が組織的に地域サービスを提供する事例はほとんど見られない。しかし、公立大学の相次ぐ設立や地域に関する学部・学科設置は地域の大学に対する期待の現われでもある。大学は今後ますます個性化しなければならないが、地域自体も独自の資源を蓄積しなければ生き残ることはできないだろう。そうした意味で、大学と地域は相互依存の関係にある』（岡本義行・法政大学社会学部教授）と、大学の役割についての一歩踏み込んだ提言と、大学・地域間連携の大きな可能性、そして進むべき方向性について述べている。

《大学を拠点に総合型地域スポーツクラブ》

そして、その具体的な取り組みの一つとして、多摩地域の44大学が共同でJR立川駅などにサテライトキャンパスを設立し、一般教養科目の講座を共同で開くとともに、生涯学習やSOHO、NPO活動支援など産官学共同事業の拠点としても活用することについて、5月31日付の日経新聞が伝えている。

また、大学と地域との連携を考える場合、大学生と地域との関わりも重要な要素である。5月23日付の日経新聞は『中央大学や工学院大学、東京農工大学など関東の46大学は・・・産学官が連携してインターシップを進めるため、「インターシップ推進協議会」を発足させる』ことを伝え、9月27日付の毎日新聞は、雇用の新しい受け皿と

して、大学生がNPOでインターンシップを実施している様子を報道している。

そして、地域スポーツの分野でも大学と地域との連携が進みつつある。

早稲田大学人間科学部が、埼玉県所沢市や地域住民と連携して運営する「所沢市西地区総合型地域スポーツクラブ」の活動である。大学の施設が活動の拠点となり、10種目を、五輪メダリストの太田章教授のほか、学生界のトップ選手らが指導に当たっている。4月5日付の毎日新聞は、シリーズ"スポーツ21世紀～新しい波"でその詳細を伝え、「クラブ」の会長である佐々木秀幸教授の『早稲田でも地域の理解がなければ、いずれは経営が行き詰る。少子化時代の今、クラブの会員がスポーツ以外の公開講座などにも関心を高めてくれることは生き残るためにもプラスになる』というコメントを紹介している。まさに、早稲田大学でさえ、生き残り戦略の中に地域との連携を据えているのである。

《日本体育大学と地域との連携》

さて、本学は、世田谷区教育委員会との連携で、昨年度より『子どもの"からだと心"を考える』をメインテーマに「公開講座」を実施している。講演、講義、実技を織り交ぜての多彩なプログラムは多数の参加者から好評を博し、親子で参加できる数少ない公開講座として行政からも評価を得ている。また、今年度は11月3日、4日の両日、『子どもの"からだと心"を考えるⅡ』として、昨年度より募集人員を大幅に増やしての開催となるが、区民の要求を汲み上げた、行政との協働の取り組みは、本学が地域との新たな連携を形づくる上で、重要な核となっていくのではないだろうか。

世田谷区教育委員会スポーツ振興担当係長の後藤敏朗氏は、本学と世田谷区との関係について『区民スポーツ祭などのスポーツ事業に対して、これまでも日体大の学生の支援をいただき、地域スポーツ政策の策定においても、日体大の教員の協力を得ている』とし、『今後の地域スポーツ振興（総合型地域スポーツクラブの育成も含めて）を考えた場合、大学のスポーツ施設や人材をどのように活用させていただくかが大変重要になってくる』ことや『小学校、中学校、高等学校のクラブ活動の指導に日体大の学生も含めた多くの外部指導者を登用したい』とする考えを明らかにし、今後本学が地域スポーツ振興の領域で、重要なキーパーソンとなっていくであろうことについて示唆した。

《今後の課題に対する多様な意見》

最後に、NPO法人コミュニティ・フォーラム（準備会）の「報告書」から、大学・地域間連携の今後の可能性と課題について、特徴的な意見をいくつか紹介する。

『地域社会の求めるニーズを適確にとらえた上で、対応可能なところから着手すべきである』（青山学院大学）、『大学の果たす役割は単に施設の開放や、知的資源の社会の還元に止まらず、地域社会の文化センター的幅広い役割も担っていると思われる・・・』（成蹊大学）、『地方の大学の現状は、地域コミュニティについて、十分認識し実践しなければ大学の役割を果たしているといえない立場に置かれている』（長崎純心大学）、『地域資源を大学内外で有効に利用するとともに、大学の資源を地域に生かしていくため、学・官・産・民協力の推進体制が必要』（九州龍谷短期大学）、『大学は地域の文化の拠点となるべきである。そのためには、大学へ地域住民が来るのを待つのではなく、こちらから出て行かなくてはならない・・・』（同朋大学）、『地域に存在する大学であることの責任と自覚を教育機関側が深く認識し、地域社会との連携強化によってより一層教育研究内容を高めることが重要である。そして大学の教育研究は、地元に還元することが原点であり、地域の共有財産としていきたい』（北海道東海大学）

それぞれの大学の実践は多様であり、それぞれに課せられた課題もまた多岐にわたる。「冬の時代」を迎える遙か以前より「開かれた大学づくり」ということが叫ばれてきた。それは、大学改革の大きな柱に据えられるべきものであり、少なくても生き残り戦略の道具や手段ではなかった筈のものである。今、大学は改めてその存立のミッションとして「地域に開かれた、地域とともに生きる大学づくり」を問われているのではないだろうか。

いよいよ、大学そのものが試される時代に突入した・・・・。

平成ニュース

■平成13年度在籍者数

■日本体育大学

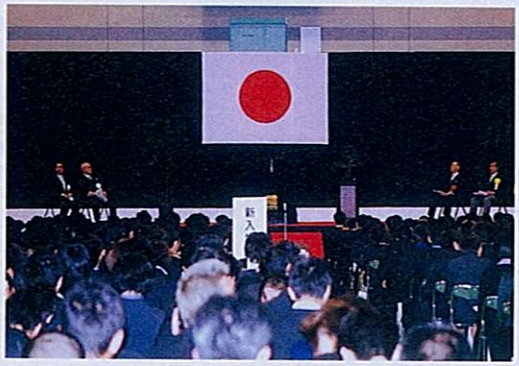
平成13年5月1日現在

区分	1年	2年	3年	4年	合計
体育学科	875 (191)	955 (222)	854 (213)	1004 (216)	3688 (842)
健康学科	175 (84)	184 (83)	189 (96)	184 (89)	732 (352)
武道学科	127 (29)	130 (32)	96 (20)	120 (20)	473 (101)
社会体育学科	184 (50)	187 (55)	204 (82)	183 (60)	758 (247)
合計	1361 (354)	1456 (392)	1343 (411)	1491 (385)	5651 (1542)
体育専攻科	13 (4)	——	——	——	13 (4)
大学院博士前期課程	35 (9)	33 (10)	——	——	68 (19)
大学院博士後期課程	7 (1)	6 (2)	8 (1)	——	21 (4)
合計	42 (10)	39 (12)	8 (1)	——	89 (23)

( )は女子内数

■日本体育大学女子短期大学

区分	1年	2年	合計
体育科	140	138	278
保育科	59	68	127
合計	199	206	405



平成13年度入学式（横浜・健志台キャンパス）

第9回日本運動生理学会大会を終えて

日本体育大学大学院　研究科長　中野昭一

”21世紀・運動生理学の展望“という副題の下に、第9回日本運動生理学会大会を2001年7月31日、8月1日の両日、日本体育大学横浜・健志台キャンパスで開催した。

大会長（中野昭一）の基調講演として「研究のconception」が、また、シンポジウムⅠでは「局所筋の酸素・エネルギー代謝の測定と展望」として、栗原敏・東京慈恵会医科大学学長、浜岡隆文・東京医科大学講師の座長によって、シンポジウムⅡ「呼吸と運動」が本間生夫・昭和大学医学部教授、高橋一樹・日本体育大学教授の座長の下に、シンポジウムⅢ「新しい運動療法への運動生理学的アプローチ」は、矢部京之助・大阪体育大学大学院教授、米本恭三・東京保健科学大学学長の座長によって、シンポジウムⅣ「NATAの公認アスレティックトレーナーのglobalizationについて」が、堀居昭・日本体育大学教授、山田保・日本体育大学教授の下に行われた。なお、一般研究発表としては、口頭発表49題、ポスター発表74題が報告されている。その他、各実験機材、専門図書の出展が28企業によって展示された。

なお、前日、東海大学校友会館で行われた理事会では、円滑に議事が進行し、理事懇親会には長谷川正明・日本体育大学学長のご出席も得て、理事の諸先生方と大会関係者が和気藹々の中に懇談した。

さて、本大会に全国より参集された会員は約500人に上り、盛会裡に2日間の学会を滞りなく開催することができたことは、私たちにとっても意義あるところであり、大変喜んでいる次第である。しかし、これには、学会の運営に携わられた学内の諸先生、同窓の諸兄姉、さらには会場の受付、設置などをされた、大学院生、学生諸君の努力の賜であることはいうまでもないが、大学当局を始め学内の事務系の皆様方など関係各位の絶大なるご支援によるところであり、ここに改めて深甚なる謝意を表する次第である。

「オープンキャンパス2001」開催

7月28日横浜・健志台キャンパス、9月8日東京・世田谷キャンパスにて本学への進学希望者、保護者、高校教諭を対象とした「オープンキャンパス2001」が開催されました。

参加者数は健志台が370名、世田谷は658名と、全体では1,028名で昨年より414名増え、大盛況でした。

前半のプログラムでは、長谷川学長、小田学部長の挨拶の後、学部・学科・科の紹介、取得資格、入試概要、学生生活紹介、就職状況説明と具体的な全体説明を行いました。後半は、自由参加で在学生が案内するキャンパスツアーやカリキュラム・入試・学生生活・就職に関する個別相談会を開き、関係の教職員が個々の質問や相談に答えました。

このようなオープンキャンパスは各大学・短大で積極的に行われており、本学も今年で13回の開催を数え、参加者からいただいたアンケートなどを参考に、資料やプログラムのさらなる充実を図り、今後益々活性化させていきたいと思います。

第10回「幼児教育講座」開催

本年7月31日、東京・世田谷キャンパスにおいて、短大主催（後援：世田谷区教育委員会など）による第10回「幼児教育講座」が、「21世紀の子どもの健康と幸せな環境づくり」をテーマに開催され、60名の方々が参加しました。

今年の講演は、「子どもの健康な食生活」をテーマに、成長の著しい子どもたちの食事や食習慣について医学博士の本多京子先生に講演していただきました。

また、毎回行っている実技は、NHKの「お母さんといっしょに」の体操のお兄さん(元)でおなじみの瀬戸口清文先生にお願いしました。「運動遊び～リズムにのって～」をテーマに、3時間があっという間に感じるほど、子どもたちは楽しく体を動かし、遊具を使って思いっきりみんなで遊んでいました。

今後も、少しでも多くの教育現場の方々や地域の方々に参加していただける講座内容を企画していきたいと思います。

「日本育英会奨学生」採用状況

日本育英会奨学金は国の育英事業で、本学で推薦している奨学金制度の中で最も採用数の多い奨学金です。現在大学、大学院、短大合わせて1,154名がこの奨学金制度を利用しています。今年度も4月に全学生を対象に募集を行い、438名が応募し、287名が新規採用されました。（詳細は左記の表のとおり）4月の定期採用以降、追加募集が行われることもありますので、今後希望される方は学内の掲示に注意してください。

■貸与月額（平成13年度採用者実績）

		第一種（無利子）		きぼう21プラン（有利子／年利3.0%以内）
		自宅	自宅外	
大学		51,000	61,000	3、5、8、10万円から選択
専攻科		51,000	61,000	3、5、8、10万円から選択
大学院	博士後期課程	119,000		5、8、10、13万円から選択
	博士前期課程	85,000		
短大		50,000	57,000	3、5、8、10万円から選択

■採用状況（平成13年度）

		応募人数	採用人数
大学		397	261
専攻科		3	3
大学院	博士後期課程	5	3
	博士前期課程	9	4
短大		24	16
合計		438	287

[上半期クラブの主な大会成績]

クラブ名	大会名	結果	氏名・他結果
■ウエイトリフティング部	全日本学生個人選手権	69kg級　優勝	下玉利瞳
		75kg級　優勝	大塚望美
		75kg超級　優勝	佐々木生子
	全日本選手権	53kg級　優勝	野村依可
		75kg超級　2位	佐々木生子
■剣道部	東京都私立短期大学学生スポーツ大会	団体優勝	
		個人　準優勝	佐藤純子
■ゴルフ部	全米アマチュア選手権	ベスト8	清田太一郎
	日本女子学生選手権	3位	真鍋早彩
	関東大学ゴルフ男子対抗戦	優勝	
	全日本大学対抗戦	男子　優勝	
	関東アマチュアゴルフ選手権	優勝	甲斐慎太郎
■少林寺拳法部	国際大会2001	男子3段の部　優勝	奥村太一・野呂和功
		女子2段の部　優勝	秋本恵美・内藤美恵
		女子初段の部　優勝	遠山由香・代々城房枝
		女子3段の部　4位	大西由佳子・中川幸江
	関東学生大会	男子3段以上の部　優勝	藤田敬士・上杉嘉紀
		男子2段の部　優勝	中山公博・糟屋好宏
		女子2段以上の部　優勝	秋本恵美・内藤美恵
		男女有段の部　優勝	藤井利憲・中川幸江
		男子初段の部　優勝	安達　巧・長東賢士
		男子3人掛の部　優勝	福岡善基・田中由喜・増井友哉
		女子3人掛の部　優勝	中村葉子・飯野真由美・鎌田紗耶華
		女子単独演武の部　優勝	高橋亮子
		総合　優勝（松平杯）	
■柔道部	世界選手権	48kg級　優勝	田村亮子
■水泳部	日本選手権	50m平泳ぎ　優勝	北島康介
		100m平泳ぎ　優勝	北島康介
	日本学生選手権	200m平泳ぎ　優勝	北島康介
		男子1500m自由形　2位	井上　優
		男子100m平泳ぎ　優勝	北島康介
		男子200m平泳ぎ　優勝	北島康介
		女子100m背泳ぎ　2位	中村礼子
		女子200m背泳ぎ　優勝	中村礼子
		女子400mフリーリレー　2位	
	国体成年女子	女子400mメドレーリレー　2位	
	国体成年男子	100mバタフライ　2位	山口　愛
	国体成年男子	100m平泳ぎ　優勝	北島康介
		200m個人メドレー　2位	北島康介
	オープンウォータージャパンオープン	女子5キロ　優勝	野尻奈央子
	世界選手権	200m平泳ぎ　3位	北島康介
		シンクロナイズド・スイミング゛チーム　2位	藤丸真世
	ユニバーシアード北京大会	200m背泳ぎ　優勝	中村礼子
■ソフトテニス部	全日本大学選抜王座決定戦	（男子）2位	
		（女子）優勝	
	全日本学生選手権大会	（男子）優勝	
		（女子）優勝	
		男子シングルス　優勝	丸健太郎
	全日本選手権	女子ダブルス　優勝	坂下真知子・濱中浩美
■ソフトボール部	東京大学リーグ	男子　優勝	
		女子　優勝	
	全日本大学選手権	男子　優勝	
■体操競技部	全日本大学選手権	（男子）2位	
		（女子）優勝	
		女子個人総合　優勝	大須賀由美
		女子種目別 跳馬・段違い平行棒	
		平均台・ゆか　優勝	大須賀由美
		男子種目別 つり輪　優勝	長田克彬
		跳馬　優勝	田原直哉
■トランポリン部	秋田ワールドゲームス	女子ダブルミニ4位	齋藤幸恵
	全日本学生選手権	女子　優勝	
		女子　個人	齋藤幸恵
		男子　シンクロ　優勝	都竹貴弘・山口悠樹
■軟式野球部	全日本大学選手権	男子　優勝（5連覇）	
■バスケットボール部	日本女子学生選抜大会	女子　優勝	
	関東女子学生選手権大会	女子　優勝	
■バドミントン部	全米オープン	男子ダブルス　準優勝	大東真也
	東日本学生選手権	女子シングルス　優勝	松尾美穂子
■ボート部	全日本学生選手権	男子かじなしフォア　優勝	
■ライフセービング部	全日本室内選手権	総合　優勝（13連覇）	
		50mマネキンレスキューレース 女子　優勝	奈良優紀
		100mレスキューメドレー 女子　優勝	奈良優紀
■陸上競技部	日本選手権	十種競技　優勝	平田卓朗
	日本学生対抗選手権	十種競技　優勝	平田卓朗
	ユニバーシアード北京大会	4×100m1位	奈良賢司
■レスリング部	全日本選手権	フリースタイル63kg級　優勝	池松和彦
		グレコローマン97kg級　優勝	森角裕介
	全日本学生選手権	フリースタイル54kg級　優勝	松永共広
		フリースタイル58kg級　優勝	松尾大士
		フリースタイル63kg級　優勝	池松和彦
		グレコローマン63kg級　優勝	柳川育廣
		グレコローマン69kg級　優勝	佐野裕樹
		グレコローマン85kg級　優勝	森角裕介

MY VOICE

みんなの広場

このコーナーは、「日体大に関する感想・意見」を取材や投稿により紹介するページです。学生をはじめとして保護者・卒業生・高校生・一般の方から、さまざまな感想・意見をいただきました。今後も"みんなの広場"へ自由な声をお寄せください。

●納得！参加して本当に良かった

（『東北ブロック保護者と大学との交流会』参加／学部2年女子学生の保護者、仙台・会場にて取材）

遠方から娘を送り出していますので、心配に思うことが多くあります。今日は大学から学長先生はじめ教職員の方々がいらっしゃるということで、学生生活の様子、クラブ活動の様子、寮生活の様子などをお聞きできればと思い、主人と一緒に参加しました。

就職に対する心構えや対策などについてもお聞きすることができましたので、次に娘が帰省したときには家族で就職についての話ができたら、と考えています。

交流会終了後には懇親会が催され、直接教職員の方々とお話をする機会を得ました。娘は今年日本育英会奨学金の申し込みをしたのですが、残念ながら採用されませんでした。採用されなかった原因や今後の募集の予定などを直接担当の方からお聞きすることができたのも大きな収穫でした。

今後とも、このような機会をより多く設けていただきたいと考えております。

●雰囲気に感激

（『平成13年度入学式』参列／学部1年男子学生の保護者、横浜・健志台キャンパスにて取材）

次男の入学式ということで来ました。実は長男も日体大を卒業して、今は地元で非常勤講師をしながら教員採用試験の勉強をしております。長男の入学式には参加できなかったものですから、今回は来ることができてよかったです。

初めてこのキャンパスに来たのですが、学生みなさんも本当に明るく、元気いっぱいでいい雰囲気だなぁと感じています。また、広々として施設も本当にきれいで、思う存分勉強に、クラブ活動にがんばってくれたらと思います。そして将来は、日体大卒業生としてりっぱな社会人になって欲しいですね。

●自分もこれで日体生！

（『新入生オリエンテーション』エッサッサ／学部1年男子学生、横浜・健志台キャンパスにて取材）

あこがれの日体大に入学して、オリエンテーションが始まりました。これからの学生生活がどうなるのか緊張感でいっぱいです。

その緊張の中、今日は日体大伝統のエッサッサの指導を受けました。自分自身、うまくできているなんて感じられませんでしたし、激しい動きはないのですが、気持ちを入れないとできないことがよく分かりました。

高校の時、実演会で初めて見たときの感動は、なんと言ったらいいか、とにかく始めの太鼓の音から終わりの学生たちが退場するまで、正直なところしばらく席を立つことができなかったほどです。その感動を味わったエッサッサを自分がやってみて思ったことは、たった一度や二度教わっただけでは、先輩たちのあの感動を与えられる演技は不可能だということです。でも、エッサッサは日体生となった自分の一部になりました。これからは、機会があったら自身を持って大きな声で、力強くやってみようと思っています。

●見てくれ、先生の母校

（高校3年生・受験生を引率され大学見学に見えた高校教諭からの後日便り：抜粋）

卒業して20年、高校で体育の教諭をしていますが、生徒が「先生の大学に進みたい」といってくれることは本当に嬉しいことで、生徒と一緒に訪問させていただきました。

当日は、たくさんの資料や相談、キャンパス内の見学と、本当にお世話になりました。引率した生徒は本当に体育・スポーツが好きで、ずっと陸上をやって、部活でもとにかく周りの面倒見がよく、競技成績はたいしたものを持っているわけではないのですが、日体大に進んで好きな体育の勉強をして、たくさんの先輩・後輩を作って、将来は地元に帰って教員になってくれたらいいと願っております。

自分の周りにも日体卒の先生がたくさんいらっしゃいますし、体育の先生イコール日体大という図式は不変のことだと思っております。今の時代、教員になるには並大抵のことではありませんが、生徒の気持ちを私の立場で摘み取ることは絶対にいたしません。その気持ちを受け止められる大学であると信じております。

今後とも我が母校の活躍を祈念いたしております。

●さすが、ニッタイ、絶対入るぞ！

（『オープンキャンパス2001』参加／高校3年女子生徒、横浜・健志台キャンパスにて取材）

いろんな大学がオープンキャンパスを行っていますが、私は絶対日体大に入学したいので、他には目もくれずこの日を待ちつづけました。

健志台キャンパスってでっかいですね。そしてきれいで。こんなところで学生生活できたらどんなに幸せだろう。

将来の夢は、子どもからお年よりまでいろんな人にスポーツをすることの楽しさを教えられるインストラクターになることです。小学校の時からスイミングやってて、自分自身大学でトップとして活躍できるとは思っていないけど、その時の先生のようになりたいんです。その先生、いつも笑顔で、明るくて本当にみんなを楽しくさせてくれるんです。だからしっかり勉強して、どこでも通用するようなインストラクターになりたいと思ってます。

■このコーナーへ、手紙・FAXで自由な声をお寄せください。

郵送／〒158-8508 東京都世田谷区深沢7-1-1
日本体育大学・日本体育大学女子短期大学
『NITTAIDAI』みんなの広場宛
FAX／03-5706-0949

[NITTAIDAI(ニッタイダイ)3号] 発行日●2001年11月 発行●日本体育大学／日本体育大学女子短期大学 広報委員会 TEL 03-5706-0921 FAX 03-5706-0949 制作協力●(株)図書出版

INFORMATION

dot. NITTAI

■学年暦（平成13年11月以降のもの）

月	日(曜日)	行事
11	2(金)～4(日)	日体フェスティバル
	22(木)	大学院　修士論文研究題目(最終)提出締切日(M2年次)
	30(金)	大学院　学位申請書(博士)等提出(D3年次)
12	3(月)	大学院　博士論文中間発表会研究題目提出締切日(D2年次)
	12(水)	大学院　博士論文中間発表会(D2年次)
	21(金)	12月の授業終了
	24(月)～28(金)	大学　スキー指導実習(体育・健康・武道学科2年)第1団
		スキー(学外集中実技)(社会体育学科3年)
		スキー理論・実習(社会体育学科2年)
		短大　スキー実習(1年)
	25(火)～	冬季休業[1／6(日)迄]
平成14年		
1	7(月)	1月の授業開始
	7(月)～11(金)	大学院　学位申請書(修士)等提出期間(M2年次)
	21(月)	大学院　修士論文発表会(全学系／M2年次)
	21(月)～26(土)	後学期定期試験期間
	25(金)	大学院　後学期授業終了(試験を含む)
	26(土)	後学期授業終了(試験を含む)
	28(月)～	短大　教育実習1(保育科1年)[2／16(土)迄]
	28(月)～30(水)	大学院　博士論文口述試験
2	1(金)～5(火)	平成14年度入学試験
	6(水)～8(金)	大学院　修士論文口述試験(M2年次)
	6(水)～16(土)	大学　スキー指導実習(体育・健康・武道学科2年)第2・3団
		スキー(学外集中実技)(社会体育学科3年)
		スキー理論・実習(社会体育学科2年)
		短大　スキー実習(1年)
	7(木)～19(火)	大学　スケート指導実習(体育・健康・武道学科3年)
		スケート(学外集中実技)(社会体育学科3年)
		短大　スケート実習(2年)
	13(水)～26(火)	短大　スポーツ現場実習(体育科生涯スポーツコース1年)
	22(金)	大学院　修士論文研究題目提出締切日(M1年次)
	19(火)～20(水)	平成14年度博士後期課程入学試験
3	1(金)～8(金)	ホームルーム期間(成績ガイダンス含む)(全学年)
		次年度履修申告手続き期間(大学1～3年・短大1年)
		就職オリエンテーション(大学3年・短大1年)
	10(日)	卒業式、大学院学位授与式(東京・世田谷キャンパス)
	11(月)～	春季休業

■九州実演会開催（12月20日～12月23日）

＜日程＞

●12月20日(木)
福岡公演「北九州市立総合体育館」
12:30 開場／14:00 開演／16:00 終演

●12月21日(金)
大分公演「大分県立総合体育館」
13:30 開場／15:00 開演／17:00 終演

●12月22日(土)
佐賀公演「佐賀県総合体育館」
13:00 開場／14:00 開演／16:00 終演

●12月23日(日)
長崎公演「長崎県立総合体育館」
12:30 開場／14:00 開演／16:00 終演

■平成14年度入試日程　お問い合わせ先／入試広報室 TEL03-5706-0910

募集区分	願書受付	試験日	合否(合格)発表
＜学部＞			
推薦入試Ⅰ期	11/1～11/7	11/25	11/29
推薦入試Ⅱ期	12/10・11	12/16	12/18
一般入試	1/7～1/15	2/2・3　2/4・5	2/9
帰国子女特別選抜	11/1～11/7	11/25	11/29
研究生・科目等履修生・聴講生	3/4	3/12	3/14
編入学	1/17～1/21	2/1	2/9
＜大学院＞			
博士前期課程Ⅱ期	2/12～2/15	3/2・3	3/4
博士後期課程	1/21～1/25	2/19・20	2/21
研究生	3/4	3/12	3/14
＜専攻科＞	3/4～3/7	3/12	3/14
＜短大＞			
推薦入試	11/1～11/7	11/25	11/29
一般入試	1/7～1/15	2/1	2/9
帰国子女特別選抜	11/1～11/7	11/25	11/29
科目等履修生・聴講生	3/4	3/12	3/14

※博士前期課程Ⅰ期は日程終了

■広報委員長　袴田 大蔵

8月1日付けで広報委員長となり、長谷川学長を始め、学内外多くの方々から刺激を与えていただき広報の重要性を再認識しているところです。
まずはその広報媒体のひとつである広報誌について、日体大のさまざまな情報を本学関係者みなさまと共有化すると共に、学内のコミュニケーションの活性化を図ることを目的に昨年発刊された本誌「NITTAIDAI」も、今回03号を発刊することができました。これもひとえに皆様方のご理解とご協力の賜物だと承知しております。
今後は、ホームページ、大学・短大案内「ENERGY」の充実、更には広報ビデオ等制作につきましても着手をいたし、委員会として一層の努力をしてまいりますので、今後ともご指導、ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

[編集後記]
本誌「NITTAIDAI」は昨年11月20日に創刊、今年4月1日に02号を発刊いたしました。そして、8月1日付けで広報委員会のメンバーが新しく編成され、本03号は新メンバーにとって創刊号となりました。特集のインタビュー記事はいかがだったでしょうか？ほとんどの先生が7月1日付けでその職に就かれ、後期の授業が始まって間もない多忙な時期に急なインタビューをお願いしたにもかかわらず、快くお受けいただきました。この誌面を借りてお礼申し上げます。
春号・秋号、年2回の発刊を進めていると、季節の移り変わりの早さを痛感します。世田谷キャンパスの前、駒沢通りの銀杏も間もなく黄色に色づき、雪が舞ったと思ったらすぐにも桜の季節がおとずれます。年は重ねても、いつもフレッシュな編集でみなさんにじっくり読んでいただけるよう取り組みます。